

令和7年度弘前市総合教育会議

資 料

■ 協議事項 「みらいの健康」に係る教育環境の充実について

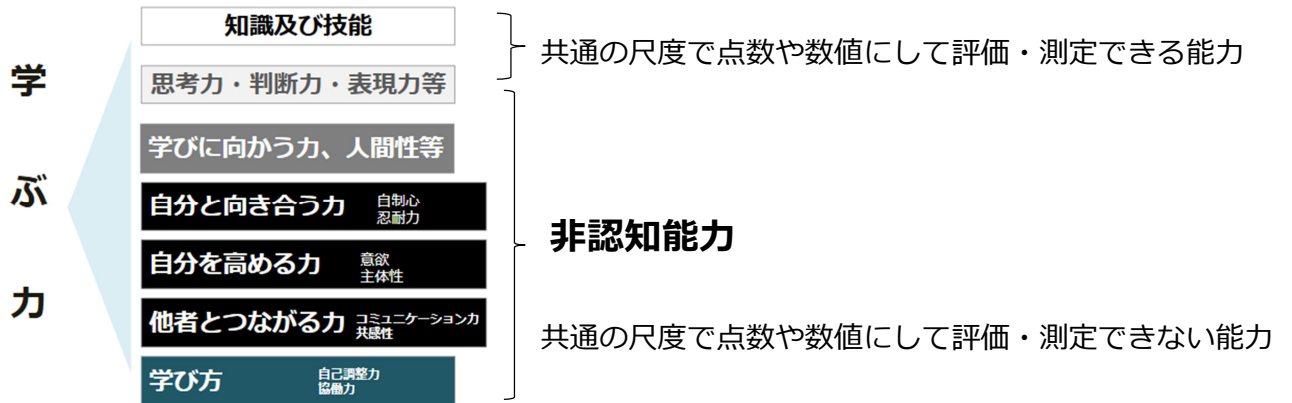
「みらいの健康」は弘前市総合計画後期基本計画のリーディングプロジェクトの一つに位置づけられ、重点的、効果的かつ効率的に推進していくこととしており、地域の未来を担うひとづくりを目指すものとして掲げております。地域の未来を担う人材を育てていくには、こどもの頃からの教育環境はとても重要なものであります。

市及び教育委員会として今後、どのような取組に重点を置き教育環境を充実させていくべきかなど協議いただきます。

【話題提供 1】総合的な「学ぶ力」の向上について

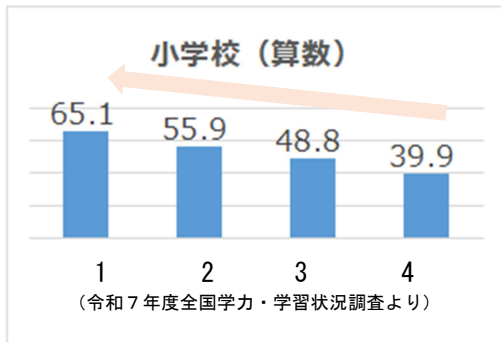
…（担当：学校指導課）

（1）教育委員会の示す「学ぶ力」



※両者は明確に分けられるものではなく、互いに影響し合い、高め合う関係

（2）「主体的な学び」と学力



「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」

- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

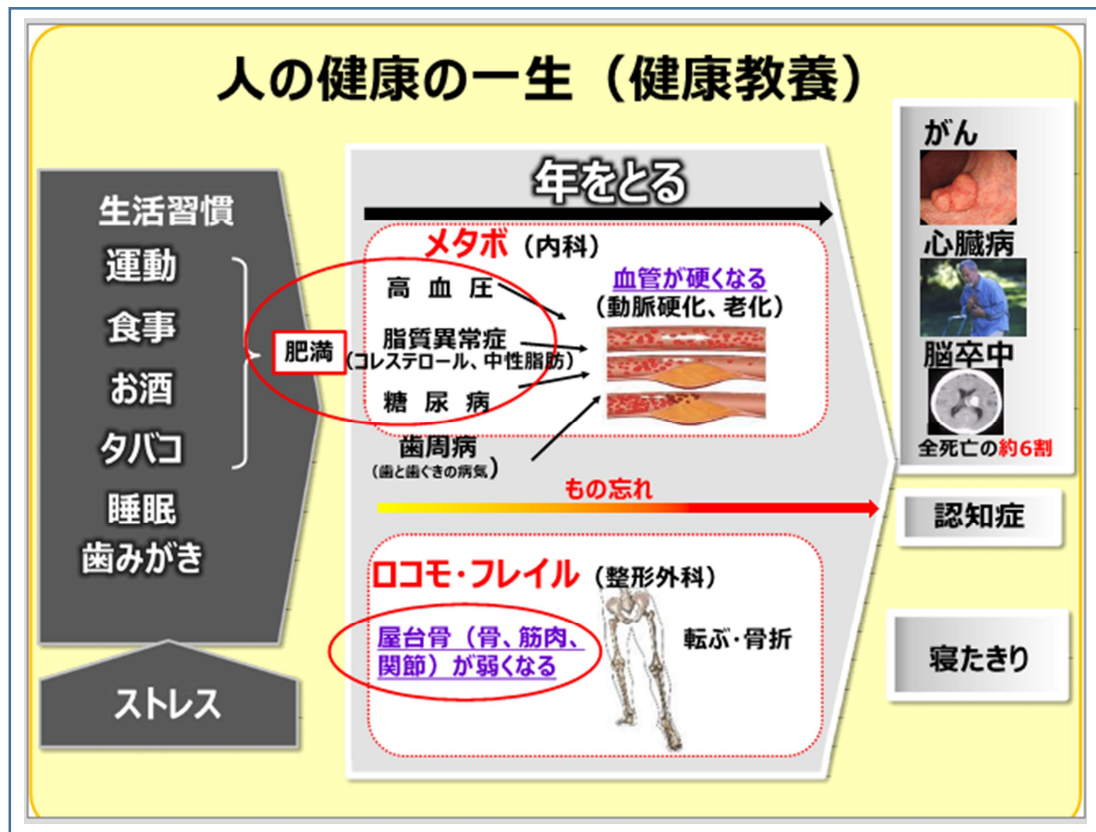
「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」と考える児童ほど正答率が高い

【話題提供2】健康教育の推進について

・・・(担当 学務健康課)

(1) 弘前市教育委員会が実施している健康教育コアカリキュラムについて

健康コアカリキュラム：中路氏が作成した「ひとの健康の一生」を利用した健康教育



対象学年：小学校6年生、中学校2年生で1時間以上 ①から③を関連させて実施

①授業等

弘前大学中路重之氏作成の資料を使用した授業を実施すること
授業前後や授業中にベジチェックや血圧計・歩数計等の測定体験や栄養教諭による「食の指導」を組み合わせた授業を推奨

②組織活動

全校・学年・学級単位での朝マラソンや縄跳び、児童会活動の組織活動等

③周知活動

学校だより、保健だより、学習発表会、参観日等の周知活動

(2) 学校でのベジチェック®の測定について

令和6年度から、市立小・中学校で実施→弘前市内でも1万人超

全国でも珍しい高測定率

保護者には、測定の内容や結果のお知らせが行くことを周知→家庭でも話題に
学校保健会の研修では、数値の良い児童に野菜摂取のひけつをインタビューする動画を作成・発表した小学校も

ベジチェック®で野菜摂取量を視覚的に測定できる→食生活の見直しにつながる
→小さい頃からの健康教養の獲得 →自分と家族の健康寿命を考えられる人材の育成

【話題提供3】不登校・不登校傾向にある児童生徒への対応について

…(担当:教育センター)

(1) 不登校、不登校傾向にある児童生徒の現状

- ・市立小・中学校における不登校児童生徒数(100人あたりに換算)
令和4年度は2.9人、令和5年度は3.2人、令和6年度は3.4人であった。
- ・「各学校から提出される不登校等に関する報告書」の項目を、不登校だけでなく、不登校傾向にある児童生徒の把握をより重視する様式に変更した。不登校傾向の児童生徒は、不登校児童生徒と同程度の割合である。

(2) 不登校、不登校傾向のある児童生徒に対しての課題

- ・学校や家庭、関係機関と連携し、未然防止、早期発見・早期対応に努めているものの、不登校傾向の児童生徒は増加している。本人が抱える悩み、学習環境、家庭環境、社会全体の影響などが複数絡み合っている場合が多い。
- ・保護者が、一人で問題を抱え込むこと等が懸念される。
- ・校内教育支援センター※は、不登校対策として効果的であると認識しているものの、人的な配置がない。学校においては、教員の未配置、特別な配慮が必要な児童生徒への個別支援など、数多くの課題を抱えている状況にあり、余裕教室への登校、保健室登校など各校が工夫を凝らして対応している。

※校内教育支援センター・・・学校には行けるものの、自分のクラスに入りづらいときや、少し気持ちを落ち着かせてリラックスしたいときに利用できる場所(学校内の余裕教室等を活用)

(3) フレンドシップルーム(事業内容・効果・課題など)

- ・市立小・中学校に在籍し、集団生活に困難を感じている、不登校及び不登校傾向にある児童生徒に対し、活動を短時間に制限しながら集団生活への復帰に向けた支援を行っている。
- ・利用状況は、令和4年度が52人、令和5年度は59人、令和6年度は53人である。(令和7年度は、12月末日現在で小学生が13人、中学生が22人の計35人)
- ・令和6年度は全通室生53人のうち、学校への再登校につながった児童生徒が6人、通室しながら学校へ部分登校するようになった児童生徒が39人であった。中学校3年生21人は全員が高等学校に進学した。それ以前の年度についても同様の傾向となっている。
- ・通室生一人一人の負担感に配慮し心を安定させ、安心して通室できる環境づくりに努めている。
- ・遠隔地の児童生徒に対して、通室の機会を広げる取組を試行している。